

## 小規模大学における学生支援の試み（5）

－奈良産業大学学生相談室の活動（平成25年度（2013））から－

### A Trial of Assisting Students Who Need Support and Advice in a Small-scale University(5)

－Activity of Counseling Room in Nara Sangyo University(2013)－

菅 徹  
Toru Kan

#### はじめに

本年4月より、本学は「奈良学園大学」と名称変更した。人間教育学部・保健医療学部及び、従来からのビジネス学部・情学部の四学部体制となった。この状態が、ビジネス・情報の両学部学生が卒業する3年後まで続くのである。

翻って、筆者が本学に赴任して5年間（2009～2013）、情報学部の教員として、ゼミ・教職課程の授業担当以外の殆どの時間を学生相談活動にあててきた。また、学生相談活動の記録を毎年紀要に記してきた。相談室の記録を残していくことは、組織的な相談活動の歴史をもたなかった本学の学生相談の新たな歴史を創出していくという観点で、非常に重要なことと考えている。筆者が本学着任以来、常に意識してきたことは、学生相談が継承されるという前提で全学の相談組織の構築をしていくことであった。今後も、この点は変わることなく努力していくつもりである。

さて、「奈良学園大学 紀要第1集」の記述内容を概略的に紹介する。①本学相談室平成25年度の相談室での学生相談面接。②教職員対する年間5回実施した定期学生相談研修会記録。③学生相談に関連する各種の研修会から学生相談にとって有用な研修内容を紹介し、具体的に活用する方途を探る。④本学、学生に対する就労支援の在り方について、NPO法人等の活用方法ないし、協働の可能性を記す。⑤本学のリメディアル教育について、一年間の推移を検証していく。最後に、⑥筆者と本学の学生相談について、今後の課題と展望を述べる。

#### 1. 平成25年度（2013）の学生相談活動概要

##### 1.1 個別の学生相談

##### 1.1.1 学生相談実施学生の「実人数」「延べ面接回数」（2013.4～2014.3）

表1-1は学生・保護者への個別相談件数・教職員に対するコンサルテーションの実数である。まず、学生への個別面接について説明する。表の左縦軸①～⑪は筆者による個別面接の人数である。この中で、⑤・⑨・⑩以外は特別な支援を要する学生（既卒生一人を含む）である。しかし、ここに示した11名は前年度<sup>(1)</sup>と違い、「相談内容の内訳」にあるような明確な区分をすることができる。第29集<sup>(1)</sup>（昨年）では、「学年の推移によって流動し、複合

的な問題へと発展していく可能性がある。学生個々人も成長・変化しているのである。」としている。前年度までの面接回数と比較すると、減少している。その要因として考えられるのは、筆者の校務・授業、学生相談の定期研修会の準備等、密度が濃くなってきていることと、教職員や保護者からの相談依頼が少なかったことが挙げられる。また、過去五年間の学生相談活動で、学生生活に重大な危機介入が必要な場合を除けば、学生生活に支障を来す学生が教職員の間で特定され、目が行き届いてきたと解釈することが出来る。これは、不断に行われてきた相談活動の啓蒙、特に学生相談定期研修会、学生援助シートの活用の提案、学生相談にまつわる大学組織の整備によって可能になったものと考えられる。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
①			1										1
②	2	2	3	2		1	1	1	1	3			16
③		1	2				3	3	2				11
④		3	2	1									6
⑤			2			1							3
⑥											1		1
⑦		1								1			2
⑧										1			1
⑨										1			1
⑩										1	1		2
⑪										1	1		2
⑫										1	1		2
合計	2	7	10	3	0	2	4	4	3	9	4	0	48
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
保護者					7	7					1		15
教職員	1	1	1			4		1					8

表1-1 月別面接延べ人数及び面接回数

	勉強・進路	心理・適応	その他	
実人数	2	9	1	12
延べ回数	3	44	1	48

表1-2 相談内容の内訳

表1-2の「心理・適応」の項目では実人数9名、延べ面接回数44回と、個人面接のほとんどを占めている。さらに、心理・適応の割合が高いのは、この5年間一貫した傾向である。特別な支援を要する学生が増加してきたことについては、予想されたことであり、驚くにあたらない。また、相談件数が、前・後期の終わりに多い傾向にあった。これは、学務（現・教務）課から、15回の授業の節目にあたる、5・10回目の授業終了後になる時点で、学生の欠席回数が集約される。単位取得が微妙な段階になった際に、アドバイザー教員が相談への道筋を作ってきたことによるものと思われる。今後は、個人別・縦断的に成長・変化の様子を捉えることを通して、卒業までの支援効果を高める必要がある。（1.1.4の事例で述べる）

### 1. 1. 2 学生相談実施学生の「実人数」「延べ面接回数」5年間の統計（2009.4～2014.3）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均延べ面接回数
2009	11	13	27	26	17	11	17	12	14	12	8	6	174	14.5
2010	8	4	2	12	2	16	5	19	12	11	2	3	96	8.0
2011	16	15	10	17	6	3	11	12	5	6	5	2	108	9.0
2012	5	8	8	11	6	2	8	4	5	5	1	2	65	5.4
2013	2	7	10	3	0	2	4	4	3	9	4	0	48	4.0
合計	42	47	57	69	31	34	45	51	39	43	20	13	491	8.2

表1-3 2009～2013年度における学生への延べ面接回数

上記の表1-3に示した統計<sup>(2)</sup>は、筆者の個人面接の延べ件数である。全体を概観すると2009年度の面接回数が突出している。これは、本学のそれまでの学生相談の実態を明白に示したものだともいえる。何も手がつけられていない。筆者の着任以前は週一度、非常勤カウンセラーが、面接を受けに来る学生を待っているという状態であっ

たそうだ。学生や教職員に対する周知徹底はどのようにされていたのか。学生が自発的に来談する可能性は殆どないと言える。稀に、心配したアドバイザー教員が連れて来るかも知れない。しかし、週1回の面接のために訪れる、顔も知られていないカウンセラーのところに行くだろうか？ 着任してから、学内での教職員等の対人関係の様子を観察した結果、個々の教職員は困ってはいるが、それを集約して、組織的に解決していこうというノウハウが本学にはないことがわかった。長年、高等学校で教育相談のための組織作りを仕事としてきた筆者にとって、未知のフィールドである大学で新しい仕事を始めることになったのである。カウンセラーの役割を担ってきたのが、筆者一人であったので、面接回数が、5年間の月平均面接回数が、8.2回となっていることに驚いている。これは、授業との兼務であることを考えるならば限界ではなかろうか。

少子時代に入り、学生の獲得は大学の死活問題になってきた。そこで、学生に手厚く、勉強や生活に心配りしていくのは当然のこととなった。折から、小・中・高校での特別支援教育を受けた学生が大学に入学してくる事態となった。このような大学を取り巻く環境の変化は、学生への支援内容の変革に拍車がかかるであろう。今後、このような対応は本学のみならず、他大学でもユニバーサルデザインとなっていく趨勢である。

### 1. 1. 3 学生相談実施学生の「実人数」「延べ面接回数」4年間の統計（2010.4～2014.3）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
2010	保護者	0	0	0	2	2	5	1	0	0	0	0	1	11
	教職員	2	1	3	2	1	2	2	3	2	3	6	2	29
2011	保護者	0	1	3	4	3	7	3	3	2	3	6	3	38
	教職員	3	4	3	5	2	3	2	2	0	2	4	5	35
2012	保護者	0	1	0	1	3	4	3	0	0	0	3	0	15
	教職員	3	5	3	4	2	3	2	2	0	2	4	5	35
2013	保護者	0	0	0	0	7	7	0	0	0	1	0	0	35
	教職員	1	1	1	0	0	4	0	1	0	0	0	0	8
合計	保護者	0	2	3	7	15	23	7	3	2	4	9	4	79
	教職員	9	11	10	11	5	12	6	8	2	7	14	12	107
保護者・教職員合計		9	13	13	18	20	35	13	11	4	11	23	16	186

表1-4 2010～2013年度における「保護者・教職員」への延べ面接回数

表1-4 保護者と学生へのコンサルテーションの回数<sup>(2)</sup>は、8・9月に集中している。前期の成績が8月下旬に各家庭に送付される。その結果を踏まえて、後期の授業開始直前の9月下旬に保護者会が開催される。そのために、アドバイザー教員に呼ばれて、三者面談に同席することが多い。成績の問題については、アドバイザー教員が粗方の説明をする。問題は生活の改善についてである。多くの場合、親はお手上げの状態にあることが多い。この場合、しっかり話を聴き取り、大学は学生をバックアップしていく姿勢があることを示し、困ったときに学生支援センターに足を運んでもらいたいからである。信頼に足る学生支援を行いたいとの思いからである。このような努力の甲斐あって、次頁の学生相談事例のようなことも起こってくる。要は、学生の幸せは教職員の幸せであるという価値観を持つことが大事なのである。結局、着任以来の延べ面接回数は、2009～2013年度までに489回（学生）、186回（保護者・教職員2010～2013）、合計675回となった。日々の積み重ねは、筆者の「臨床の知」をさらに深めることになる。今後地道に臨床を探究していくつもりである。

### 1. 1. 4 学生相談事例（表1-1 ①・②について）

（できる限り、人物の特定ができないように、事例の趣旨を損ねないように変更を加えた点をご了承いただきたい）

さて、本学の学生相談活動の特徴を既卒者について、具体的な面接事例を提示する。表1-1 月別面接延べ人

数及び面接回数から、①・②について筆者との間で行われた5年分の面接回数を示した。彼らとの面接の経緯について説明する。

まず、①から。5年間の付き合いであった。在学中の面接は23回。月1回、必ず時間通りに訪れた。大学内での対人関係のトラブルで感じた心の内側を詳細に話しながら感情が高ぶり、憤慨したり、目に涙をためていたり、自分が取得したい資格の話や将来の夢を語ってくれた。卒業後に来校した2回は、就職課と筆者のところに近況報告に来たものである。2012年の4月には、正規雇用の就職を勝ち取ったという報告であった。前年の4月には、エクセル、ワードが実務で使えるようにするため、専門学校で勉強しているとの報告してくれた。そして、1年後、努力の成果はハッキリとした形で現れた。

教育相談の基本である、寄り添いながら、じっくりと話を聴かしていただく姿勢を貫くことが大事であることを筆者に教えてくれた。

	2009	2010	2011	2012	2013	合計
①	2	10	11	1	1	25
②	—	10	24	24	16	74

表1-5 5年間に担当した特徴的な面接回数

次に②の事例について。面接回数をまとめて驚いた。4年間で74回の面接を行ったことになる。彼は、二週間に一度、月2回面接に現れた。彼には、4年間話を聴かせてもらったが、どの人の人生もいろんなことがあるのだなとしみじみとした感慨を抱いた。このように、傾聴させてもらうことで、筆者の人生の一断面を顧みることがある。受容的に共感しながら、次から次に出てくる苦悩の様子を聴いていくうちに、他人事では済まされないという思いが込み上げてくる。しかし筆者は何も出来ない。方法論をアドバイスすることは出来ても、実際に実行するのは彼自身である。勇気があるだろう。頑張れるかな？体調を崩していたことも度々あった。二週間ごとの語らひは、話し始めたら、あっという間に50分が過ぎていく。これでいいのかな。進んでいないのではないか、彼の役に立っているのか、自問自答する日々が続く。「寄り添いながら、待つ」ことの意味は、カウンセリングの入門であるはずだが、実際に遭遇すると揺らぎが止まらない。結局、卒業と同時に就職が決まることはなかった。しかし、彼は自分との闘いを止めなかった。1年後、報告に来た。見事に自分との闘いに勝った。正規採用になったとのことであった。今後も自分との闘いを継続して欲しい。今後に期待したい。この事例では、面接をしていくうちに、人間の不条理を感じた。そして、「一生付き合っていこう」との覚悟が湧いてきた頃には、面接のステージが一段上昇していることが実感された。

## 2. 学生教育相談定期研修会（この項は、学生相談便り（休刊中）、「三室山」の記事を書いていることをご了承下さい）

### 2.1 学生相談定期研修会（学生支援センター主催）毎月第2火曜日の2限目（会場：1号館 1F 第3会議室）

第1回 学生相談室 4年間（2009～2012）の歩みと本年の取り組み 5/12（木）

#### ① 学生支援モデル ② 学生支援体制 ③ 「学生支援シート」の作成と運用

参加人数：教員（2）名 事務職員（3）名

1. 図書館を使用する、すべての学生に適切に対応できるよう、勉強をしていきたいと思ひます。また、特に支援を要する学生については、図書館で具体的にどのような対応が必要なのか、教えていただければと思ひます。  
(事務職員・女性)
2. ・専門的學生支援において、外部機関と連携する際、学生のプライバシーをどう取り扱うか？ 親と本人の同意が得られない場合は外部との連携は難しい？
- ・学期を通して、注意する基準を保つ場合、教職員個々だけでなく、全教職員で基準を共通化すべき？（その場合、誰が、どのように基準を決めるか）  
(教員・男性)
3. 四年間の取り組みと現在の状況、よく理解できました。ありがとうございました。ただ、窓口等の関係もあり、出席者が少ないのは残念です。（全学的な取り組みなのに）  
(事務職員・男性)
4. 授業の進め方とアスペルガーなどのある学生への対応につ

いて、日々考えています。全学生がわかる授業は無理として、全15回の目的を達成させることを主にするか等、少しでも社会に学生が出られるように頑張ります。何か問題が起きたらご協力ください。もう一点、授業のユニバーサルデザインについて疑問があります。大学の教育とは、「知識を使う方法を教えることと」考えている（知識がなければ、それから取り組まざるを得ない？）ので、不一致な点が多く感じられました。（教員・男性）

- 音に敏感に反応する学生に対して野対応をどうしたらいいのかが、大変難しいと思う。例：飛行機の音などが、よく聞こえるが、その音を聞くと、両耳を両手で押さえて座り込むことが一度あった。（事務職員・女性）

### 筆者のコメント

本年度最初の研修会は、2009年度からの4年間で積み上げてきた学生相談の進化をまとめる形となった。残念ながら、参加者は6名でした。しかし、研修会を実施させていただいていることに感謝している。教職員の皆様が興味を示して下さる題材を提供していくことを目指して、今後も努力していきます。次に、4. についてコメントさせていただきます。実は研修会の際にも申し上げましたが、障害学生に対する授業のユニバーサルデザインは、日本学生支援機構の文書等と合致しているのです。「障害のあるなしにかかわらず、すべての学生に質の高い教育」と述べています。それは、すなわち、①“ないこと”でなく“あることから”②“大きなこと”でなく“小さなこと”から③“抽象的”でなく“具体的”に④“否定的（～しない）”でなく“肯定（促進）的に（～しよう）”に⑤“複雑（間接的）”でなく“シンプル（直接的）”にという内容です。これにより、全ての学生に対しての学力を担保していこうというものである。

## 第2回 『学生が思わず本音を語る、学生相談方法論』 7/16（木）

参加人数：教員（3）名 事務職員（4）名

- 元教員だった習性が抜けず、途中までは受容的・共感的に聴いていても最後まで、同じ気持ちに立つことができない。そして、最後には指導者としての立場に立ってしまう。また、「ミラクルクエスチョン」では、本質的に解決するのは非常に困難な事象の場合、安易に解決してしまうような幻想を与えてしまうのではないかという不安を感じる。「スケーリング」の方が、今はこの段階だけれど、ちょっとずつ、進んでいけば、最終目標に到達できるのだと解決の道筋と計画を示してあげる方がいいのではないのでしょうか。これも指導になってしまいますが……。 (事務職員・男性)
- 菅先生、いつも研修会ありがとうございます。今回、カウンセリングの基本技法を久しぶりに振り返ってみることで、頭の中ではわかっているけれども、実行できていないものだというのを改めて思い知らされました。最近、学生が何を考えているのかわからないとか、どうしてわかってもらえないのかと思うことが多くなっていたのですが、こちらから学生の話聴くという姿勢が全くできていないことが、原因だと気づきました。このような研修会は続けていくことが非常に重要だと、つくづく感じましたが、参加者が少ないので、何とか対策を考えなければいけませんね。（教員・男性）
- 今回の研修会で、一番大事なことは、「思いやりと心配り」で、自分自身のことでも考えても、相談するときに、思っている事を、まずは全部聴いてもらいたいし、わかってもらいたいので、そういう相手の立場にたって考えることの大切さを改めて感じることができました。また、うなずきや繰り返しといった、基本的技法が相手に、どのように効果があるのかを学ぶことができたので、それらの技法を自分なりに取り入れていきたいと思えます。（事務職員・女性）
- 研修会、ありがとうございます。二度目の参加ですが、毎回参加するたびにカウンセリングへの興味がわきます。相手が自分へ安心感をもって話してくれるように聴くことは、カウンセリング以外の会話の際にも、重要なことだと感じました。「ミラクルクエスチョン」、「スケーリングクエスチョン」、「コーピングクエスチョン」は難しく使えそうにないですが、日常の会話の時から、意識して生活してみたいと考えます。ロールプレイング、学友会の件、ありがとうございます。（事務職員・女性）

### 筆者のコメント

今回は毎年、必ず1回は取り上げるカウンセリングの基本技法を体験してもらった。全ては、ここが出発点で、ゴールでもある。今後も継続していこうと思っている。2. の先生が、言われているようにいつも使い続けて行かないと元の、感情のコントロールができないままの対応になっていきます。しかし、このようにお考えの先生がいらっしゃる事だけでも、大変に有り難いことだと思っています。先生がおっしゃるように、参加者が多くならないものかと思えます。さらに4. では、基本技法に加えて、解決志向アプローチの方法論に言及されています。ここまで出来れば、相当、学生の「心」に近づくことが出来ます。あとは、相手のペースを感じて「合わせる」、「待つ」

ことが出来れば、もっと相手の懐に入ることが出来ます。

### 第3回 解決のための面接技法 I “解決志向ブリーフセラピー”によるカウンセリング方法論 9/19 (木)

参加人数：教員（9）名 事務職員（4）名

1. 機会があったら（そして覚えていたら）、ブリーフセラピーを使ってみたいと思います。（教員・男性）
  2. 今回も、いくつかの会議と時間が重なり、出席者数が伸びませんでした。今後もよろしく願います。研修会で学んだことを忘れてしまって、学生との面接時についつい、こちらから指導したくなり、一方的に話してしまうという、私の例を挙げていただいたので、解決策の一つとして、研究室のボードに研修資料を貼り付けて、毎日読むようにしました。面談をする前に資料をじっくり読み直し、実践できるようにしたいと思っています。（教員・女性）
  3. 学生を教育し、自律した社会人として、送り出す責務がある。大学の仕事として、どこまで、学生の「甘え」を受け入れ、受容して聴くべきなのか、いつも疑問に感じる。面談時に、学生の言い分を受け入れるのか、現実の厳しさを指摘すべきなのか、迷うことが多い。学生の意見を聞いた上で、大人としての常識、あるいは自分としてはこう考える。と言うことを伝えるときもある。（事務職員・男性）
  4. 今回、ブリーフセラピーによる「六つの有効な質問」を教
- えていただき、普段から意識することによって、このような相談や悩みに対しては、この質問や言葉で話すといい等といったことが、すぐに判断できるようにしていきたいと思いました。（事務職員・女性）
5. 知識としては、以前に何った内容が多いのですが改めて、「実践できてないな」と反省させられました。「ブリーフ」と言いながら、10回では、本来の心理相談からすれば、十分短いのですが、率直に言って、「長すぎる」「とても、それだけの回数続けられない」と感じます。（教員・男性）
  6. 昨年もお聴きしたテーマでしたが、実際学生と接する上では、なかなか出来ないで、何度も繰り返して体にしみこませていきたいです。（受容・言い換えなど）「困っているはずなのに他人事のように」な学生は本当に多いと感じます。何らかの形で「底を打つ」体験が必要なのではないかと思いますが、いかがでしょうか？（教員・女性）
  7. 「うなずく」「繰り返す」「言い換え」を、なるべく、普段の学生対応で活用しています。繰り返すことで、学生の態度の変化が感じられる気がした。今日の学習で得たことを、今後も取り入れていきたいと思っています。（事務職員・女性）

#### 筆者のコメント

参加された教職員の皆さまが一様に言われるのは、「言葉上では理解できるが、実際に試してみるとできない」ということです。「頭で理解する」ことは、自分だけで済みますが、実際に話す相手がそこに存在すると、自分のペースで話をするのは不可能です。相手の苦悩に共感しようとしているのですから、相手が解決の方法を、自分より知っているということを信じて、そのお手伝いをするということです。3. では、「全て受け入れる」ところ始まると思って下さい。今回の教職員のコメントの多くは、学生の「心」が回復したときに、「心」にしみ込む内容であって、そのレベルに達していないと思うことができる方ならば、学生に的確なアドバイスが出来ると思います。「育つとき」を、「待つ」事が出来るかが勝負の分かれ目です。

### 第4回 大人の発達障害（講義とVTR上映）11/14 (木) 参加人数：教員（4）名 事務職員（3）名

#### ①発達（アンバランス）障がいとはどんな問題か？ ②大人の発達障害の実際

1. 大人の発達障害の説明と共に、NHK「あさイチ」の映像を見ると、具体的で大変よく分かりました。まさに、本学の学生にも見かける状況もありました。今後も、このような映像を出来るだけ多く見せていただけると、より具体的に分かってきますので、よろしく願います。参加者の反応もよかったように思います。今回は、公開授業の期間中であり、参加者が少なかったことが残念ですが…（教員・女性）
  2. 障害を一つの個性と捉え、その人に合った対応をする必要から、このような研修を是非、全教職員に受けてもらいたいと思う。また、当の学生自身も、課程と密接な連携の上で、正確な診断で、自己についての理解を深め、応じた訓練をしてもらえばと考える。（事務職員・男性）
  3. 「大人の発達障害」ということで、てっきり職場の同僚と、どう接するかという話かと、勘違いしておりました。大学生ということだったので。正直、本人の怠けやわがま
- まではないかと思ってしまう場面が多々ありますが、発達障害の可能性も念頭に、辛抱強く接していこうと思います。（教員・男性）
4. 個人のプライバシーや人権に配慮しながら、ASDの診断を受けてもらうように勧めることが難しい問題だと思っています。出来る取り組みとして、学内の連携と情報共有から、きちんと出来ればよいのではないかと思います。大学として、どこまで、責任を持つかということもきちんと決める必要を感じました。（事務職員・女性）
  5. 企業の場合、さまざまな仕事の中からASDの人、それぞれに向くものを探すことは可能（もしくはデンマークの会社のように、それに特化した会社を作る）かと思いますが、大学での、特に授業などでの対応はどうしたらよいのが難しく感じました。例えば、締め切りを守れない学生に対し、その学生だけ、締め切りを延ばすのは、他の学生の理解がないと出来ません。（教員・男性）

**筆者のコメント**

今回の研修会はタムリーであったと思っている。1. VTR視聴で大変分かり易かったというコメントがありました。また、本学の学生の状況を反映している内容であったため、考えさせられる部分が多かったと思います。この内容で7名の参加者では、正直もったいない気がしました。機会を改めて、再度取り上げたいと思います。

**第5回 学生の心理的問題（1）統合失調症とは？（2）うつ病と認知行動療法（講義とVTR上映）1/23（木）**

参加人数：教員（5）名 事務職員（4）名

- |   |  |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 気になる学生を組織で支援できる体制がとれて、自分だけで悩まず済みそうですが、対応する先生の負担が心配にもなります。（教員・男性）</li> <li>2. カウンセラーのビデオが大変参考になりました。相談者のプラス面を数値化することで、前向きにする点は、今後の指導に役立てたい。（教員・男性）</li> <li>3. 今回のケースを聞くことによって、このくらいの、気になる学生は、自分の周りに非常に多いことに気づきました。今後、菅先生のところにご相談に行くことが多いと思います。よろしくお願いします。（教員・女性）</li> <li>4. 事例発表については、当研修会参加者間で個人名を出して、参加者共通の問題とし、その事例学生を、全員で見守る体</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>5. 学生の様子を客観的に評価するのは、かなり難しい作業になると思う。（教員・男性）</li> <li>6. チーム支援会議がどのように行われるのか、イメージがつかめた。いろいろと相談することがあるかと思しますのでよろしくお願いします。（教員・男性）</li> <li>7. 情報の重要性を改めて学びました。この情報を元に、早く対応方法を確立して、ベストな学生生活と将来を導けるように目指したいと思いました。今回のH先生と同じような学生がいるので、研修会中にいろいろと考えさせられました。可能ならば、話し合い以外でも、対応できるようになりたいと思います。（教員・男性）</li> </ol> |
|---|--|

**筆者のコメント**

今回はVTRを効果的に使用することが出来たと思います。内容も、「統合失調症」と「うつ病」とその治療法としての認知行動療法を取り上げました。また、コメントを読むと、本学の学生相談活動と学生相談学会や日本学生支援機構が推進する相談活動は同じレールの上を走っているという自信を持ちました。研修会の内容についても多くの要望を寄せていただきたいと思います。その上で、もっと効果的な、学生相談組織を作っていきたいと思っています。

**3.1 本学以外での、学生教育相談研修会****3.1.1 日本EMDR学会**

EMDR（眼球運動による脱感作と再処理法）は、フランシーン・シャピロ博士が1989年に発表した外傷的な記憶を処理できる心理療法である。この最新の心理療法に筆者は、取り組むこととした。そこで、さっそく、以下のトレーニングを開始した。この学会に入会できる基準は、最低、Weekend1トレーニングを行った者で、EMDRのトレーニング対象者は、①医師（2年以上）の臨床経験があること。②臨床心理士（臨床心理士会）である。

**（1）Weekend1トレーニング**

日時：2014年3月21日（金・祝）～23日（日）の研修に参加した。研修は大きく、講義と実習、全く別日程のベーシック・コンサルテーションに分かれている。講義は日本EMDR学会理事長の市井雅哉氏（兵庫教育大学大学院）による一斉講義。また、参加者は2～4人一組で役割を交代しながら実習を行う。9人程度に1人の割合でファシリテーターが付き、実習をスーパーバイズしていただいた。この体制は、実習場面での急速な心理的变化に適切に対応するためのものである。

（2）ベーシック・コンサルテーション 第1回：4月24日、第2回：5月29日の2回、電話会議で市井雅哉氏、他8名で各2時間（22：00～24：00）の事例研究会を行った。筆者はEMDRを用いた事例を提示し、事例についての有益な示唆を受けた。

### 3. 1. 2 日本心理臨床学会

#### (1) 日本心理臨床学会 第32回秋季大会

日時：2013年8月25日（日）～28日（火） 会場：パシフィコ横浜

3日間にわたり開催された大会で、筆者は大学生にまつわる多くの事例発表やシンポジウムに参加した。今ホットな話題は、①発達障害学生の就労支援、②学生の自殺問題、であった。また、臨床心理士の国家資格問題も論議を呼んでいた。

### 3. 1. 3 日本学生相談学会

#### (1) 日本学生相談学会 第51回全国学生相談研修会

日時：平成25年11月25日（月）～11月27日（水） 会場：東京国際フォーラム

筆者は、分科会Cコース：C3の「困難ケースを中心とした事例研究」のコースを選んだ。参加者40名、講師は青木健次先生（京都大学カウンセリングセンター）の元、三日間で延べ10時間のセッションを行った。

氏によると、「大学自体が困難なケース」と指摘された。少子による学生確保を基本命題として、大学が取り組むべき「困難」は山積している。試行錯誤は大学の本来的な役割であって、大学も多くの「困難」を抱えているが、それは避けたいものがある。それを、青木先生と一緒に考えたという思いであった。淡々と話されるが、学生に対する深い愛情を話の端々に感じた。筆者もあのようなカウンセラーになりたい。青木先生とのセッションは何物にも代えがたい、かけがえのないものだった。

#### (2) 日本学生相談学会 第38回学生相談セミナー

日時：平成26年2月28日（金）～3月1日（土） 会場：立教大学 池袋キャンパス

＜大学と学生相談の喫緊の課題。＞ 学生の自殺を防ぐために

＜1日目＞・講演Ⅰ「危機にある学生を大学はどう支えうるか」 高石 恭子氏（甲南大学学生相談室）

・講演Ⅱ「学生の自殺の状況」 内野 悌司氏（広島大学保健管理センター）

・ワークショップ「困難を抱える学生への対応」 山中 淑江氏（立教大学学生相談室）

＜2日目＞・講演Ⅲ「学生が『死にたい』と言うとき」 青木 健次氏（京都大学カウンセリングセンター）

何と言っても青木先生の事例は、「何でもあり」である。学生への深い愛情に基づいている。自由自在である。さりげなく技法がちりばめられている。何度でも聞きに行きたい。

筆者は、井の中の蛙であったことを思い知らされた。ここに登場する先生方は皆、実際に学生の死に直面している。本学では「自殺」の問題は、今のところ喧伝されていない。しかし、その備えをしていく必要があると思知らされた。

また、配付資料の中に、2014年4月に日本学生相談学会から発行された「学生の自殺防止のためのガイドライン」を開いてみると、本学での取り組みのガイドラインとして、研修会に使える内容になっていることに気がついた。今後、この課題に取り組みたい。

### 3. 1. 4 日本学生支援機構

#### (1) 障害学生支援セミナー 「発達障害における移行期の支援2」—高等教育から社会参加に向けてできること—

日時：平成26年2月22日（土） 会場：関西学院大学

基調講演 「発達障害のある学生へのキャリアサポート」 梅永 雄二氏（宇都宮大学）



「最近の大学における諸問題」として、以下の3項目を示された。

- ①国語の読み書き、簡単な計算などの学習支援が必要
- ②教室に入れない、他の学生の中に溶け込めないために保健管理センター登校
- ③まるで中学校における特別支援教育

発達障害の人の退職理由をハードスキル、ソフトスキルに分けて具体的に説明された。その内容は、そのまま対人関係に連動しており、学生（求職者）と企業のマッチングへと繋がっていく。この流れは、そのまま本学学生の状況を説明されたものと感じた。

また、氏がキーワードとして挙げられた、ライフスキルのチェック項目は、①日々のライフスキルチェック 28項目、②1週間6項目、③1ヶ月3項目、④1年間4項目、⑤その他のライフスキル 10項目であった。この内容を対象学生に指導し、実行・点検を行っていくのが、発達障害のある学生支援の具体的な活動になるのではないかと考えた。

本学に於いても検討して、実際に運用していこうと思う。非常に刺激的であった。

#### 4. 「学生相談活動における就労支援の取り組み」について

##### 4. 1 外部機関との連携（特定非営利団体による支援）

###### 4. 1. 1 就労移行支援事業所 「来夢green」

発達障害があるが故に、就労や就職活動がうまくいかない方への特化した支援を2013年6月から始められた。代表社員の平田氏は、元ジョブコーチである。「就活がうまくいかないのは？ 発達障害だから？」と思った人のために設立。18歳～65歳までの発達障害の方で、一般就労を目指す方に最長で2年間、就労に必要な知識や能力を身につける支援を行い、発達障害のある方の自立と社会参加の促進を支援される。

支援内容

###### 生活支援

・基本的な生活習慣の確立（挨拶・みだしなみ） ・生活リズムの安定 ・健康管理 ・個別面談

###### 職業支援

・作業を通して、基本的な（連絡・報告・相談）等職業習慣の確立 ・ビジネスマナー ・基礎学習の向上で自信の回復  
・就職に関わる検定に挑戦 ・雑学的な学習課題

###### その他

SST（ソーシャルスキルトレーニング）での基礎的な職業生活の構築

・グループワークにて日常生活の困難を克服 ・求人検索同行 ・外部実習 ・就職後のフォロー 等

〒630-8233 奈良市小川町12番扇ビル Tel: 0742-27-5552 Fax: 0742-27-5553 mail:limegreennara@yahoo.co.jp

###### 4. 1. 2 NPO法人 わかもの国際支援協会

【理念】「違い」を価値に変える 【ビジョン】誰もが役割と尊厳を確保でき個性を活かした社会貢献・社会参加できる社会

【ミッション】必要ときに必要な学習と働く機会が与えられ、誰もが経験と個性を活かして社会貢献の主体となり活躍できる場と環境を整備する

【アイデンティティ】 スゴイ!ヒキコモリ集団

\*2009年7月にインターネット上で集ったひきこもり及びその家族によって設立した自助グループが母体となったNPO法人です。現在も運営スタッフ・会員は「ひきこもり経験が6ヶ月以上ある方、もしくはその家族」によって、失業中の若者を中心に仕事創りを行っています。

###### 行動指針

- ・「ひきこもり」等孤独な経験を活かして専門性を高めた、次世代を切り拓く才能集団でありたい。
- ・常に謙虚に感謝を忘れず、変化を恐れず、自己を革新していく集団でありたい。
- ・人と何かが「違う」という孤独が、社会にはまったく無い新しい創造とイノベーションをもたらすと信じ続けたい。
- ・誰も見捨てた山の中から、誰もが見たかった世界を探しだすチカラをもっていたい。
- ・社会に貢献し誰かのために何かをすることで自己を助ける、自助（セルフヘルプ）精神を失わない集団でありたい。

[http://wakamono-isa.com/wp/wp-content/themes/original/images/common/head\\_logo.png](http://wakamono-isa.com/wp/wp-content/themes/original/images/common/head_logo.png)

以上、2つのNPO法人を紹介した。担当者と直接お会いした。また、来夢greenが定期的に、オープンキャンパスを実施している。本学学生に参加してもらった。今後、広報していくことにする。

## 5. 「リメディアル教育」について

### 5. 1 リメディアル教育総括会議

日時：平成26年1月29日(水) 13:00～15:00 場所：1号館 第2応接室

1. 学生支援センター長挨拶
2. 参加者 リメディアル講師 清水先生（水・金担当）、大田先生（月～金）、小倉先生（木）、岡田先生（火）  
支援センター運営委員 杵崎先生、菅先生、羽太先生、棚橋先生、松本先生、岡本事務室長  
陪席 松田（智）先生
3. 配付資料（H25前期リメディアル結果と後期リメディアル出席記録）
4. 以下の話題等について、自由に意見交換した
  - （1）今年度実施したリメディアル教育について（学生の理解度や指導法など）
  - （2）来年度に向けての課題などの検討
  - （3）その他 感じたことなど

#### 意見交換で出された主な内容

##### 学生について（理解度や指導方法、気づいた点や気になる点など）

1. 定期的に自主勉強会に参加していた学生は、みんな真面目であった。授業で分からないところややりたい分野について自分から「この部分を教えてください」と申し出る学生もいた。試験前には登録時間以外にも来て勉強していた学生もいた。
2. きちんと学習会に参加した学生に対して、なんらかのメリットを与えてあげたい。（たとえば勉強会に参加したことにポイントを与え、そのポイント数に応じて成績面で優遇してやることはできないだろうか？）単に「試験に合格する」という目的だけでは真の意味での学習意欲がわかないのではないか？
3. 参加している学生の中には人間関係を結ぶことが苦手で仲間を作れない学生もいて、ここが心を開く機会であり大学での「居場所」になっていると感じる。常に彼らは1人で行動していて、登録時間以外の空き時間もここで勉強して過ごす学生がいる。
4. 個々の学生の状況に合わせた指導を行ってきた。学生の様子を見ながら指導内容や学習時間の調整をしてきた。個別に話を聞きながら、つまづいている箇所をさかのぼって探っていくと、単純な引き算ができなかったり、短文の文章も書けない学生もいて、小学、中学時代に先生から放っておかれたことに対し、大人への信頼感が感じられないことがある。

##### 教材について

5. 分野ごとに演習できる数学のプリント教材や、与えられた語句から短文を作らせるベネッセの国語教材など、用意されている教材は適切であった。
6. 消防などの公務員試験を目指すため、過去問を調べるなど、就職したい部署の問題レベルをよく知った上で勉強させてやりたい。市販の一般的な問題集だけでは適切でないことがあった。

##### 改良すべき点や提案事項など

7. 基礎教養科目の授業内容とリメディアル教育との連携をもっと取る必要があるのではないかと。日本語コミュニケーションや基礎数学の授業や試験内容について、授業担当者とお互いにもっと密接な情報交換をして協力しながら、つまづいている学生たちの学力向上を図ってほしいのだが。
8. 基礎科目の授業で、テキストのある分野をスキップされてしまったり、担当者によっては授業内容や授業方法が異なるためにとまどっている学生がいるようである。
9. リメディアル教育の目的は何なのか、対象の範囲が広すぎて的をしばれているのではないかと。大学の授業について行けない低学力層の引き上げを図るためなのか、SPI試験を突破できるようにするためのものか？大学としてリメディアル教育をどうしていくのがいいのか、ベクトルをあわせていくべきであろう。
10. 3年前に、「SPI試験を受けるレベルまで達していない学生が多い」、「3年生から学力不足に気づいてからは遅いので、それまでにSPI試験を解ける状態にまであげてあげたい」との就職課からの要請もあって、1、2年生からのリメディアル教育を開始した。今、全学生必修の「キャリアの授業」があるが、この授業は学生たちに本当に役立っているのだろうか。キャリアの授業で就職に向けての意識づけをきちんと行ってもらった上で就職課と連携しながら学生たちにリメディアル教育を行っていく必要がある。

##### 来年度に向けての課題などの検討

11. 学生支援センターが「ワンストップ・サービス」として、様々な相談ができる他、就職準備や授業等で分からないことがあれば先生がいるので気軽に教えてもらえて勉強できる場所であるということが学生たちに定着してほしい。
12. 来年度の新入生からは、再試験を受ける条件として、補習を必ず受けていることを課すので、このリメディアル教育に参加していることも条件としていきたい。
13. 新入生には、教員採用試験や看護師国家試験に合格できるレベルまで引き上げていくことが最終目的であり、「高校での数Ⅰ」が解けるレベルや30分以内に1000字以上の文章を書けるレベルまで到達できるようにしていきたい。その一つの方法として、今のリメディアル教育も使っていきたい。

##### その他

14. 卒論の指導をしていて感じることは、「コピペ」が非常に多く、きちんとした自分の文章を書けない学生が多い。
15. 留学生は日常的な日本語は話せるが、専門的なことについては話せないし、文章にできない。

## 6. まとめと今後の課題

本年度は、筆者の大学での相談活動、5年間の区切りである。①目の前にある課題を乗り越えること、②新しいトピックを追い続けた五年間でもあったとも感じている。

①については、学生相談の大学内での組織が出来上がったことである。その内容は、紀要29集に詳述されている。その中核は、「学生援助シート」の作成と実際の運用である。この点については、学生相談定期研修会で事例を取り上げ、教職員に学んでもらった。学生相談の素地のなかった本学に、やっと他大学並の組織ができたのである。もう一つの要素は、学生相談定期研修会を地道に続けていくことで、教職員の相談への関心が高まった点である。多くの教職員が、気軽に学生のことについて相談に来てもらえるようになった。学内にこの組織ができたことで、新入生にもバックアップ体制をアピールできた。

②については、「発達障害」への理解と、臨床活動を通して、自分なりの「臨床の知」を得たことである。筆者の本格的な臨床家としての歩みは25年前に遡る。それは、「解決志向アプローチ」との出会いであった。技法を深めていくための研修は、大学教員としての環境が大きく作用している。日々の面接を通して、クライアントの状況に応えられない、臨床家としての自分の未熟さを感じていたのもっと学びたいと思った。お陰様で、臨床活動は終わりのない自分との闘いであることを思い知らされた。そして、今年、NHKのEテレでEMDRという最新の療法を知った。眼球運動をクライアントに実施することで、人生上のトラウマを解消させることで、いろいろな症状を改善させる効果があることを知った。早速、研修を行う機会を得たので、研修を始めた。筆者にとって、新たな出発になった。

ということで、今後の課題は、①・②をさらに深めて、本学の学生相談をさらに充実させていくことであると思っている。

### <参考文献>

- (1) 菅 徹, 2013, 小規模大学における学生支援の試み（4）－奈良産業大学学生相談室の活動（平成24年度）から－ 奈良産業大学紀要 第29集, Vol.29,pp173-182,
- (2) 菅 徹, 2013, 小規模大学における学生支援の試み－奈良産業大学学生相談室4年間（2009～2012）の活動－ 奈良産業大学情報学フォーラム紀要・第8巻, Vol.8,pp45-52,